

思索のノート



見えないものを見る

一昨年の暮、かつて「野鳥の森」と呼ばれた場所を訪れた。その場所は、東京電力福島第1原子力発電所の構内にある。

福島県いわき市から国道6号線を進んでゆくと、沿道に立ち並ぶ家には未だ人の気配がないものも多く、門の前には柵がつけられ、植物が大いに伸びている様子も目につく。町はここ閑散として見えた。

構内視察に際して事前の説明を受けるため、まさに町の面積の大部分が避難区域解除になったばかりの富岡町にある福島第2原発旧エネルギー館へ到着し、私はあたりを見回す。「回転しアトム」はその看板を残したまま閉店していた。しかしそれから、私は戸惑った。あたりを闊歩する野生動物たち、瓦礫の山に生い茂る植物、ちよつと、チェルノブリで廃墟化したプリピャチの遊園地のような光景。私はそんなものを想像していたのかもしれない。だが、現実の私の目の前にあったのは、営業中のスーパーマーケットなどが入る「さくらモールとみおか」で、それはくありきたりな郊外の風景だった。

葉を花を 想像できるか

小林 エリカ ①

かつての「野鳥の森」

から。私は自分の考えの浅はかさに恥じ入った。そもそも放射能は目に見えないものではないのだ。廃墟は、ただの記号にすぎない。そこは私が暮らす場所と地続きで繋がっているのだ。ところで旧エネルギー館の外観は、予想以上にファンシーだった。話を聞けば、それはアルベルト・アインシュタイン、マリ・キュリー、トマス・エジソンというエネルギーを巡る科学

者三大巨頭の生家を模した建物に合体させたものであるという。その建物内で説明を受けてから、専用バスに乗って私は構内へ向かったのだ。ちなみに、その旧エネルギー館は改装され、2018年11月から廃炉資料館として一般公開されているらしい。

言いつつならコンビニのような場所だった。清潔で、明るく、どこかしこも整然と見えた。実際、作業員の方々が休憩した食事室をのぞいた。そのために建てられたというプレハブ内には、まさにローソンがオープンしたばかりだという。

東京電力の社員に案内されながらバスに乗って構内を一周した。そこで私が目にしたのは、見わたすかぎり銀色に覆われた、近未来SF映画のような光景だった。

地面に木や雑草が生い茂っていると、そこに放射性物質が付着し、放射線量が高くなりやすい。そこで、木を切り倒し、あたりを銀色のモルタルで塗り固めたのだという。そうして放射線量は随分下がったそうだが、私が見学の際手渡されたのは、防護服でもマスクでもなく、両手にはめるコトンの白い手袋だけだった。

勿論、原子炉の建屋は鉄骨が剥き出しになったままであり、その周辺の放射線量は依然として莫大なものであったが、それ以外の放射線量は、事実上ほとんど高くない。その後、作業員の方々が休憩したり食事室をのぞいたりする。階段の施設を案内してもらった。上階の丸窓から、海までつくあたり一帯を見渡した。

そこはかつての「野鳥の森」と呼ばれる巨大な森だったという。巨大な汚染水タンクだけがずらりと並んで見えた。その

脇には、数本だけ残された桜の木が、満開の花を咲かせていた。今はなきその森には、果たしてどんな植物が生えていたのか。私がそれを執拗に尋ねたところ、案内してくれた人が数週間後にメールをくれて、平成7、8年にかけて実施した調査に基づき環境省に提出した環境評価書の抜粋を差し出してくれた。メールには、昔の書類がほとんど残っていない上に、事故から6年が経ち、事故前に現場にいた人もいなくなってしまう。植生を調べるのに時間がかかってしまった、と書き添えられていた。そこに生えていたとされるのは、シバ、ススキ、ヨモギ、チヂコサ、ヘクソカズラ、ヤマハギ、ネコハギ、スギナ、セイタカアワダチソウ、ツルマメ、オオアレチノギク、シロツメクサ、アカマツ、クロマツ、コナラ、ヤマザクラ、クリ、アズマネザサ、ムラサキキキフ、ヤマウルシ、ガマズミ、サルトリイバラ、ヤマツツジ、ツルリンドウ、アゼビ、モチンキ……など、植物たちの名が続く。

今、事故から8年目の春がもうすぐやってくる。廃炉が始まるのは、あと30、40年以上後になるらしい。目に見えないものたちのことを、私はどれほどまで、想像することができのうだろうか。かつてそこに存在したはずの、植物たちひとつひとつの葉を、茎を、花を。

(作家、漫画家)
〈第21回目に掲載します〉



「東京電力廃炉資料館(旧エネルギー館(福島県双葉郡富岡町))」 デジタル銀塩プリント、銀箔、アクリルミラー 40×60 2019 Yutaka Kikutake Gallery 小林エリカ「野鳥の森」展より